

< 地には平和 >

今、声をあげないで、いつ？

大村 恵美子

今年は、クリスマスカードや年賀状を出さないことにしました。合唱団の月報は、2002 年 1 月号としては、創立 40 周年を記念し、また 2001 年 12 月 16 日の第 90 回定期演奏会の報告を中心とした、おめでたい内容になるべきなのですが、それがまとまるのは早くても年が明けてからになりますので、現在の世界状況の急変を考え、私は臨時的な色彩の 1 月号を、この定期演奏会前後、年賀状の代わりにお出しすることにいたしました。

9 月 11 日以後の日本の参戦体制

アメリカ本土の中心部に向けられた大胆なテロに燃えあがった世界中の人たちは、「これは戦争だ、テロ撲滅に総結集を！」の、ブッシュの進軍ラップに、たちまちアフガニスタン全土空爆へと、心の堰を切ってゴーサインに乗ってしまった。1 月もたない 10 月 8 日には、早くも空爆が実現。

日本でも、待ってましたとばかりの、小泉の自衛隊出動執念 アメリカ支援。

テロリストに問答は無用。暴力はいけない、話し合いで解決なんて、甘いことを言っているうちに、世界中にテロが多発するぞ！ という性急なおどしに、誰もがそかな、と思いかける。

しかし、それに対して、目には目を、とやり返したら、これはエンドレスの地獄に口を開くことになります。日本も、この半世紀来、少なくとも西アジアには独自の国策をとってきたことを忘れて、テロ撲滅 バスに急いでとび乗ろうとするだけでよいのか。こちらのほうに私たちが無思慮に舵を切ったら、どういうことが起きるのか。

まず第一に、最貧国でしかも有史以来といわれる早魃に見舞われているアフガニスタンの地に攻めこんで、ただでさえ飢餓線上をさまよう何百万の民の死を、いやがうえにも増やして、人類史上におどろくべき破廉恥の罪責の加担者となりさがる。

テロリストよりもはるかに大規模な殺人・破壊行為を招いて、かえってテロの火をますます倍化させてゆく。憎悪が時空をこえて蔓延する。

日本の平和主義は、ならず者撲滅すらもよしとし

ない、ならず者をつくらない、ならず者さえもなぶり殺しにせず、人間の道にひきもどす、そういう徹底したものでなければならない。ここで私たちの良心は、過熱状況から目覚める使命を思いおこすべきです。

「反戦の環」に参加

10 月 8 日のアフガニスタン空爆開始をうけて、早くも 10 月 13 日、弓削達、森井眞共同代表のもとに「報復戦争に反対する会」が立ち上がりました。「米英のアフガニスタン無差別空爆・地上戦弾劾！ 日本の参戦反対」の 2 スローガンを掲げて、テンポも早く、次々に集会（10 月 7 日・日比谷公会堂、11 月 4 日・すみだリバーサイドホール、12 月 2 日・東銀座中央会館）や署名、抗議行動などを展開しています。「反戦の環」がその機関紙の名称です。

私も電話をいただいて、「呼びかけ人」のひとりということになりましたが、これまで政治活動に加わったこともなく、テレビの世論アンケートの数にさえも自分の声が反映しないことをもどかしがっていた人間が、いまや参戦国の一員に実質的にも組みこまれようとする時に、「ここで声をあげないで、いつあげるのか」という思いに突き動かされました。

かつて、昭和天皇死去に際して、大学の平常活動を守ろうと率先して声明を出した、当時のフェリス女学院大学と明治学院大学の学長コンビを共同代表としているこの会ならば、ご両人とも私たちの合唱団の団友でもおありで、きっと公正で満足のゆく展開になることを期待するのです。

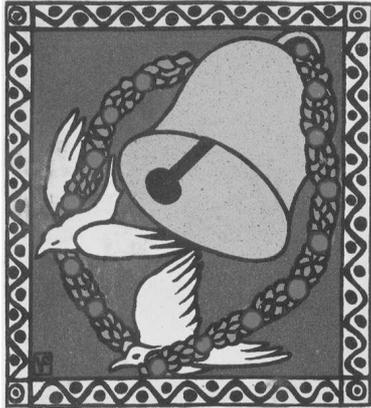
市民の良心のよりどころに

集会には、多くの、肩書きもない市民、学生、勤労者、老若男女が熱心に参加して、話を聞き、みずからも発言し、学びと一致に心ふくらませて散会していました。国旗・国歌でいためつけられている教育現場とか、多くの場で日ごろ孤立して苦しんでいる人たち、すでに始まっている不当逮捕の訴え等々、依るべき政党や組合の無力化してしまった今日に、このような場は市民の支えとして、ぜひ必要なもの

だとの感があります。

このアフガニスタン問題がもし落ち着いたとしても、半世紀たっている日本の民主化はまことに風前の灯火で、いつ吹き消されるかわからない状態です。私は、しばらくこの「報復戦争に反対する会」に身をおいて、2002年が言論・行動の封鎖、不当逮捕など、野蛮な権力の嵐の吹き荒れる年にならないように、きびしく見守ってゆきたいと思います。

私の呼びかけに誠実に応えて署名をお寄せくださった500数十人の皆様にも、心から感謝いたします。



アピール1 (11月4日)

9月11日テレビを見たとき、これは「窮鼠ねこを咬む」の図で、よほど追いつめられた人たちの仕わざだと感じました。次には、これにアメリカが、どんな仕返しに出るのか、と空おそろしくなりました。

さっそく先進国のリーダーたちが、アメリカとの連帯をうち出しましたが、それを見て、こんどは、アメリカだけに勝手にやらせはしないよ、私たちにも相談してくれよ、とブレーキをかける役にも立とうとするのかと、一応は期待しました。

でもやはり、アメリカの狂気が圧倒し、あたふたと空爆が始まりました。いったいに女や子どもというのは、体面のほうを重んじるマッチョな男どもよりも、自然に近い生き方をしていますので、こうなると、すぐに暴力はだめ、と反応します。男の人は、私がよく行く店のおじさんなども「でもあれだけのことをやられたんだから、何もしないというわけにはいかないしねえ」と、人のよい顔を曇らせるのです。私は「欠食児童を追いつめても、かえって破れかぶれに暴れるのと似ているのでは」と言います。

アメリカでも日本でも、子どもがいろいろなメディアに投書していますが、それを見ると、「殺されたからって、こっちも殺しにいけば、あっちと同じになっちゃうじゃない」という考え方が目立ちます。大人が教えるのでしょうか、よく「バカって言う人がバカなのよ」と子供が言いますが、それに似ていて、相手の攻撃をうけて立って殺せば、自分も卑し

いものに落ちてしまう、という、むつかしくいえば「人間の尊厳」という根本のところはわかっていて、これはとても大事なことだと思います。

かたや、世界の警察官を気取っていたアメリカですが、生殺与奪はぜんぶ自分の手中にあるかのように、やられたらその相手のぐうの音も出せないように、こっぴどく思い知らせてやる、国家元首だろうが誰だろうが、うむを言わず引っ立ててくる。

そういう、長年にわたってやってきた軍事制裁といわれるものを、おどろいたことに、今朝(11月4日)届いた雑誌「アエラ」では、10月中旬で、アメリカ男性の92%、女性でも85%が賛成だということです。そして、アメリカ女性は、「だって女を抑圧するタリバーンは倒して、女を解放しなければ」とのこと。解放される前に、ただでさえ前代未聞の早魃のところに、ハイテクの空爆で攻めこまれて、この冬中に野たれ死にする女子供が何百万というおそれではありませんか。話はずれているのです。

この12月16日に、私のやっている東京バッハ合唱団で、クリスマスコンサートがありますが、でもクリスマスといって浮かれている場合ではなく、プログラムの表紙4の全面に、反戦キャンペーンを考えていました。でも事態はもっと早まって、その同じものを、きのう発行した合唱団の月報(12月号)にものせました。この月報というのはもともと関係者あての内輪のもので、全国に500部ほど発送しています。赤字の報告などものっていて、少し具合がわるいのですけれども、その4ページ目を皆さんに見ていただきたくて、ここに300部ほど増刷してもってきました。人間の悲惨に途方にくれて泣いている小天使の写真です。

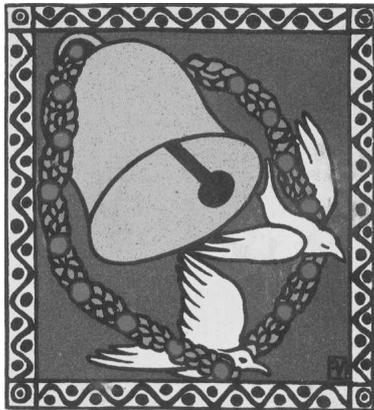
戦争やお金もうけばかり狙っている人たちには、芸術なんかとんだ暇つぶしとしか思えないでしょうが、私は、このアミアン大聖堂の有名な「泣く天使」を見て、何も心を動かされない人こそ、あわれだと思えます。大声でわめくよりも、この天使を静かに見ることで、何倍もの痛みを思い、ばかなことで人生をけがすな、との決意がわいてくるのではないのでしょうか。

ここ数年、国際会議があるごとに騒ぎ出すNGOの連中とか、過去の奴隷制や先住民虐殺にまでさかのぼっての糾弾とか、抑えつづけてきたモスLEMたちの根深く不穏な反撃とか、世界は急ピッチで新しい方向にむかって進展しているようです。

あのニューヨークの高層ビルのアニメーションのような爆破だけに心をとられ、目をうばわれて、大勢を見逃してはならないと思えます。もう、人間の見方、生き方そのものが、ぐるりとトータルに転換し

てきているのです。ブルカに包みこまれた女たちも、とにかく生きていさえすれば、間もなくまっとうな人間生活をとりもどすためのリーダーとなって活躍するようになるかもしれません。この冬を生き延びてくれることが、何よりも先決なのです。

私の根本目標というのは、紛争地からまずは武器を徹底的にとりあげることです。旧ソ連やアメリカなど先進国がきそって溢れさせてきた武器があったからこそ、パンの代わりに武器ばかりを与えたからこそ、殺し合いがつづいているので、今現在もそれぞれの国のエゴから出た軍事援助がぶつかり合っています。日本は、相手が偉そうな先進国であろうと、容赦なくとりしめる武器監視の警察官になるべきです。そのために必要な信望をかちえるような国となることが第一だと考えます。



アピール2（12月2日）

この会の発案で、反戦の署名呼びかけが始まったとき、私は100人の友人に、署名用紙を、手渡しましたは郵送でお願いしました。その翌日から今日にいたるまで、つぎつぎにそれが返ってきて、現在500人に達してしまいました。

「一言」に書き入れるだけでは足りず、もっと書かせてくださいと、便箋に勢いよく書き足して下さる方々もあり、2度3度と署名をあつめて持ってこられるリピーター、ひとりで50人以上あつめたというような方々もあって、圧倒されました。

お会いする方々、あるいは電話をかけてくる方々も、「夜ねているとき、闇のなかを空襲で逃げまどう人たちのことを思うと涙がとまらない」とか、「あたたかいお風呂に入ると、こんな思いをしてもらえたら」とか、日常のすみずみでアフガンやパレスチナの人々に心がたえず動いているのです。

今度のことで、おかげでいろいろわかったことも多いのですが、私自身も同様で、アフガニスタンといえば、けわしい高山と不毛の荒野、というイメージで、テレビなどでもしきりにそのような紹介がされているのですが、例のペシャワール会の中村哲さ

んの最新刊『医者、井戸を掘る』という本を読むと、じつはそうではなく、戦乱の前までは、緑濃く花咲き小川の流れる美しい土地だったことを知りました。それが、たびかさなる人災と、不幸にも去年は有史以来はじめての大早魃が襲って、桁はずれに大量の難民化となったのだそうです。

十数年来そこで独自の医療活動を展開していた中村さんが中心となって、医療よりもっと切実な飲み水確保が先決ということになり、短期間に大馬力で井戸を何百と掘って、住民の流出をくいとめたというのです。

そんな中村さんたちを見て、住民たちは、日本人は裏切らない、信頼できる、とどんどん親しさを増してきたところへ、理不尽なアメリカ軍の爆弾の雨。なんとそれを日本も後押しして軍隊を出すという。いったいどうして？と、現地では不思議がられているそうです。現に空爆が中村さんたちの働きを、水の泡にしかけているのです。

アフガン人の冬越しを気づかう日本の一般民たち。日本を慕うアフガンの人々。その中をひき裂こうとするのが、一にぎりの日本の政治家たちです。かれらにとっては、世界全体はアメリカの周りをまわっているのだから、アメリカ支援しか、考える内容がない。

アメリカについては、すでに多くのことが言われていますが、たとえば月刊誌「世界」12月号のなかから、たまたま目にしたものを紹介しますと

まず、広島・長崎について、よく言われ、そのつど怒りにたえないのですが、「日本に原爆を投下せず、本土決戦が行なわれれば、100万以上死んだらう、広島・長崎の被害は21万人、だからこれは正当である」という馬鹿げた話。そんな算数だけで、人類への重大な罪には思い至らないのが、この先も一貫してとられているアメリカのやり方です。イスラムの人たちが、日本人にはすぐ「あなたたちも原爆を落とされたらう」といつてくるというのは、単なるリップサービスなどではなく、深刻な連帯感のあらわれだと思えます。

それから、1993年ブッシュ元大統領暗殺計画にイラクが関与したとして、アメリカはバグダッドに23発ものトマホーク・ミサイルを撃ちこんだ。イラクがテロに成功していたら、数百人の一般市民も殺したかもしれないとして、アメリカ側はこれでも相手の犠牲者を最小限にと考えて報復したのだと強調。まさに偽善者の弁です。

私は、湾岸戦争のとき、アメリカ人の若い母親兵士が、小さな子どもたちを家に残して、知りもしない遠くの戦場に出征するのをテレビで見て、女でもすごいなー、いったい誰を守るつもりなのか、とびっくりしました。

その前にも、はるばるフォークランドまでイギリス大艦隊をくり出して勝利をおさめた、鉄の女サッチャーさんもあったり、一概に女は平和主義、ともいえないようですが、例の国連大使で大いに動きまわったマデリン・オルブライトも女傑のひとりで、1996年、アメリカが経済制裁を強行して、イラクでは50万人の子どもたちが死んでいるといわれて、「これは非常に困難な選択」だったが、総合的に考えると「代償に見合う価値はあった」と、全国放送で答えているのです。血も涙もない、とはこういうことではありませんか。

私は、21世紀には、もう武器による戦争はダメ、という世界的なコンセンサスを、ただちにつくるべきだと思います。どんな理屈を立てても、テロもゲリラも国家承認の正規の戦争なんかもない、みな等しくれっきとした犯罪だとして、考えそのものを変えなければならぬ。その中でも特に、国家が承認する戦争は、その規模の桁はずれさにおいて、また欺瞞性、偽善性において、もっとも悪質のものとして断定しなければなりません。

たとえば、この文明の時代にあって、みごとに完備した、ハイテクの上水道・下水道がはりめぐらされているところへ、上水道のほうにどぶどろの汚水をぶちまけるようなものが、「戦争」ではないでしょうか。もうこれは人間のあいだに通用させ、放置してはならない、みっともない野蛮行為なのです。

日本は、中村哲さんらのペシャワール会の行き方にのっとるべきです。誠心誠意の行為によって、土地に住む人々の信頼をかちえるということです。名誉ある一等国としてみんなから認められよう、などという、さもしい野心ではないのです。憲法9条のあのくだりは、小人たちによってたかって悪用されつつづけています。私たちの目指すのは、自分のなかにも、相手にも、ほとけごころを呼び覚ます、ということです。

もうひとつ、「世界」12月号のなかで問いかけられている課題として、オーストラリアのガヴァン・マコーマックという人の文章によりますと、いまの日本の姿が、こう記されています。

「脅威と武力行使が世界政治のキーワードであった19世紀、20世紀に変わり、21世紀のはじめ、日本という清新な行動をとる可能性のあるただ一つの大国が世界に存在するチャンスが、失われつつある。」「アジアの隣国たちとの対話を深める努力はしないが、ワシントンの呼びかけには大慌てで応えることに、日本の政治家・エリート官僚の優先順位がはっきり表明される」という、なさけないものです。

今も、あいかわらずアメリカの世論では、ブッシ

ュ内閣の強気な攻撃に圧倒的多数の賛成が続いているようですが、一方で、少数ではありませんが、たとえば11月28日号の「ニューズウィーク」日本版の読者欄に、つぎのようなフィンランド男性の投書が載せられています。

アメリカ人は選択を迫られている。自国が世界中で軽蔑の目でみられる理由を理解しようと努めるか、あるいは今後も自分たちの行動に目をつぶり、自己満足に浸り続けるのか。

剣によって生きる者は、剣によって滅びる。リチャード・ニクソン大統領がカンボジアを不当に爆撃して以来、アメリカほど武力を行使してきた国はない。

アメリカは、エルサルバドルやグアテマラ、イラン、アルゼンチン、チリなどの独裁政権を支援し、ニカラグアの穏健派政権の転覆に関与した。アメリカこそ、最大のテロ国家だ。

アメリカに対する攻撃は民主主義への攻撃だというなら、ドイツやニュージーランド、フィンランドのような真の民主国家が標的にされなかったのはなぜか。自由に対する攻撃だというなら、人権を踏みじりに、環境を破壊するアメリカが狙われたのはなぜか。

今回のテロ行為は純粋に、アメリカの外交政策に対する攻撃である。暴力や人種差別を容認する政策を改めないかぎり、テロがなくなる日は来ない。

こういう意見も多少混ぜ、政府批判などもかなり突っ込んでやるところは、アメリカ社会の度量の広さともいえるのですが、とにかく、今は早くあやまりなさい、そして一日も早く、よその国から軍隊を引き揚げなさい。けがれた手でまた戦後処理のうまみにありつこうとするのを、おやめなさい。

日本は、そんな兄貴分(?)をいさめ、自ら世界の先頭にしっかり立って、武器の威嚇をはねのけ、第一に住民の人命の確保のために、今、緊急にやるべきことを、どんどん進めましょう。あとで後悔するような、ひどい年末年始にならないよう、方向をみきわめて新年をはじめましょう。

「戦後50年、あれほど平和を、平和をと心がけてきたのに、いつの間にか参戦国の側になって、かなしい」という声もたくさんありましたが、まだ遅くはありません。無思慮な政治屋たちと、一般市民の声は、はっきり違うのだ、というメッセージを、強く世界に発信してゆきましょう。

2002年に、恥辱ではなく、人類の英知を！